

○授業づくりの視点

本校では、主体的・対話的で深い学びの視点による授業づくりを進めています。具体的には、下記のような3つの視点で、日常授業の改善に努めています。

★第一段階：「分かる・できる」をまず、実現することからスタートする

不易として大切なのは、知識や技能を確実に身に付ける「分かる・できる」授業である。どの子ども「だいたい分かっている」状態である。これが授業づくりで第一に目指すべきこととなる。これができたら、かなり力のある教師だといえる。また、素晴らしい学校であると言える。

★第二段階：分かっていることに気付かせ、子どもの認識の飛躍を促す活動を行う

子どもたちが「分かる・できる」状態になると、例えば国語では「一度読めば、もう分かったから勉強しなくていいよ」「これから何時間もかけて同じ文章を何度も読んでいくのか、いやだなあ」、算数では「もう何度もやって分かっているよ」「もうやらなくていいよ」と思っている子もいる。しかし、往々にして「本当に分かっている状態」ではないことが多い。まだ知らないことや重要なことがあるのに、気付けていない。だからこそ、教師は、子どもの認識の飛躍を促す活動をもってこようと思う。平たく言えば、第一段階の子どもたちを、分からない状態にさせればよいのだ。「分かった・できた」と思っている子に、「あれ？どうなのかな？」と思わせたらよいのだ。

第二段階には、様々なパターンがある。「分かりそうだけど、あとちょっとで分からない。」「知らなかった。」「考えたこともなかった。」「それが重要だと気付けなかった。」「うまく説明できない。」「子どもがこのようにつぶやくような活動を用意すればよい。この活動により、「分かったつもり」から「本当に分かった」状態、つまり、深い理解に到達させることができる。

「分かる・できる」が第一段階。「認識の飛躍」が第二段階。この二つの段階を踏み、子どもに新しい知識や考え方、新しい認識などを育てたら、授業は成功なのである。

★第三段階：学んだことを生かす場を用意する

第一段階「分かる・できる」で力が付き、しかも自信がついていないと、第二段階、第三段階には進めない。この意識も共通理解しておく必要がある。まずは日々の授業で第一段階と第二段階を意識した授業づくりを行い、やがて、最終段階としてこれまでの学びを生かす場を用意しないといけない。

第一段階で、「教えてほめているかな？」

第二段階で、「子どもが『あれっ？』と思う問いをもたせているかな？」

第三段階で、「学びを生かす活動を用意しているかな？」

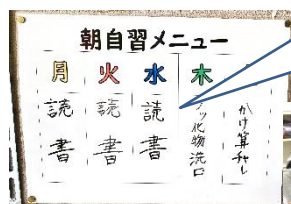
このように学校で共通理解しながら、授業改善を進めています。

「一人一人が問いを持ち続け、互いに学び合い、学びを自覚する」子どもの姿を目指し、「授業づくりの方法」を学校全体で共有しながら、授業を楽しみ、子どもたちの成長につなげることを目指しています。

○読書活動の推進 ～「読む・書く」体力を育てる～

目的・言語活動や探究活動を豊かにすること
・「資質・能力の育成」につなげること

1 読書環境の整備



全校で
読書時間を確保



図書コーナー
を新設



目的や実態に
応じた選書
(司書と連携)



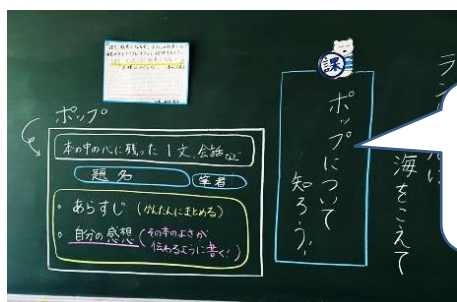
単元と関連し
た並行読書
(巡回図書を
活用)



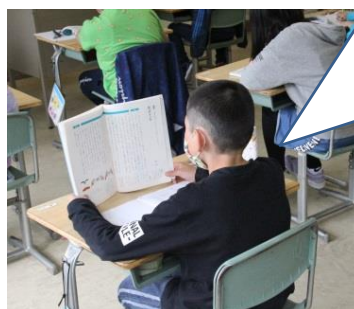
意欲を高める
読み聞かせ

考えをまとめ、
書き切る力の
育成

2 「言葉の力」を育てる「読むこと」授業の充実



目的・意図があり、
必要感を生む
単元づくり

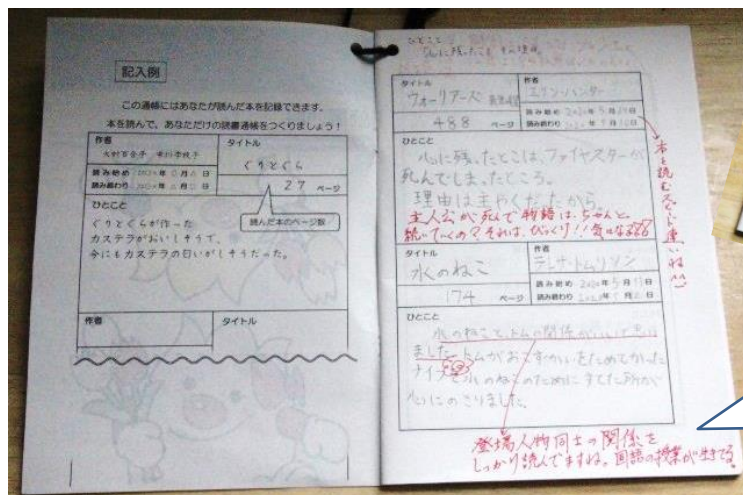


叙述から、新
たな見方(自
分の考え)や
考え方(理由
や根拠)を確
かにもつこと
の重視



複数のテキス
トから引用し、
考えをまとめ
て書く活動の
重視

3 学びを生かす場の設定



「登場人物同士の関係」
を視点として本を読み、
朝読書の感想が書かれた
「読書通帳」

「簡単なあらすじにまとめる」
「本のおもしろさを感想としてまとめる」
という「言葉の力」を使って書いた
ポップ



4 読書活動の推進計画（学習部と研修部が連携）

何のために（目的）	何を（具体方策）	どのように（方法）
読書環境の整備 ★場の設定	・利活用しやすい図書室 ・図書室の増設（高学年用）と本の更新 ・学級図書コーナーの工夫	・町立図書館との連携 ・巡回図書を活用 ・係活動との連動
読書活動の充実 ★量を増やす	・朝自習での「朝読」（新設）（月・火・水） ・読み聞かせ支援（ボランティア） （1～3年、毎週水曜日） ・町立図書館「読書通帳」の活用 （1～2年は「どくしょカード」） ・家庭学習の手引き「家読」のすすめ ・移動図書館「わくわく号」の活用 （月2回、木曜日）	・学校・家庭・地域が連携を図った指導体制づくり ・読書活動の活性化
読書指導の充実 ★質を高める	・国語科の授業との関連（校内研修） 授業づくりの工夫（「～たい」を生み出す） 例『読書通帳』をレベルアップしよう 例「おすすめの本を紹介しよう」 例「〇〇シリーズを読んでみよう」 ◎子どもに「言葉の力」を実感させる ◎「ことばのお宝帳」の実践 ◎学力の保持、繰り返し学習 ◎学びをつなぐ	・目的や意図のある学習活動（読書）で本を読む必要感や学びの自覚を高める場面の設定 「読みたい」「力が付いた」 ・物語や説明文の学び方を身に付けさせる ・実生活とつながる学習のゴールを設定



○ 特別支援教育の推進

「アセスメント・ベース」の指導や支援

～切れ目のない一貫した指導や支援のために～

1 自立活動の視点に基づいた中心課題の洗い出しと個に応じた指導や支援の充実

(1) 特別支援学級「たいよう学級」



- ・保護者や関係機関との連携の下、「個別の教育支援計画」を作成・活用し、一人一人の教育的ニーズに応じた指導を実施しているほか、引き継ぎや情報共有を重点的に行っている。
- ・通級の担任や支援員との連携を密にし、個々の中心課題の改善・克服につながるよう、一貫した指導や支援を行っている。

(2) 通級指導教室「えじそん」



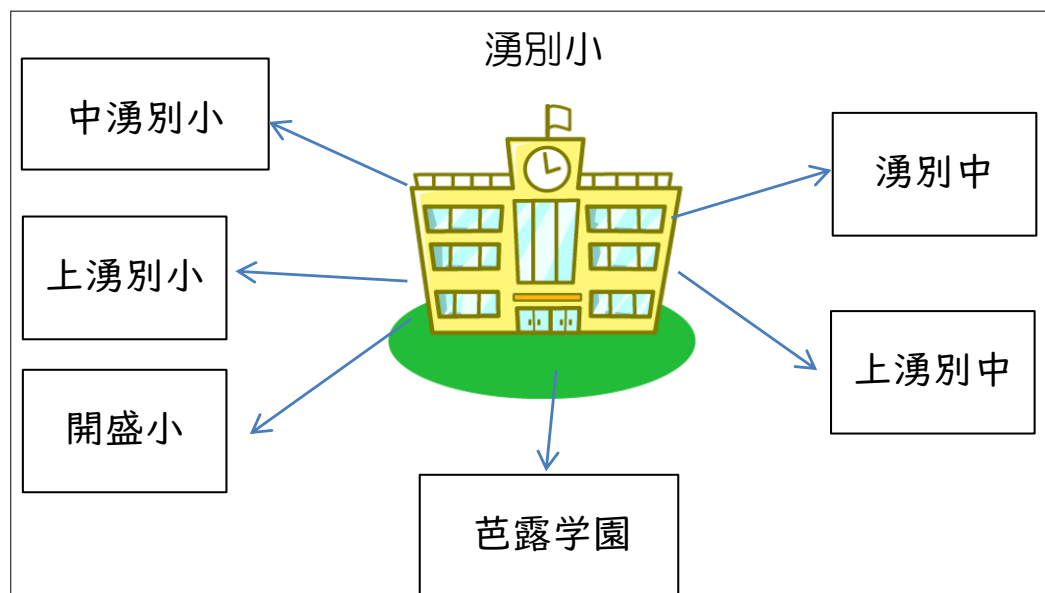
- ・週2時間程度、通級による指導を行い、個々の課題の改善・克服を図っている。
- ・「個別の教育支援計画」を活用し、通常の学級の担任や支援員との連携を密にし、通級で学んだことが通常の学級での学習活動に生きるように努めている。

2 校内研修を基盤とした校内支援体制の充実 ～チーム支援に向けて～



- ・特別支援教育に関する指導や支援についての知識や技能を身に付けることができるよう、「校内研修プログラム」や「実践事例集」を活用したり、研究団体における研修講座を積極的に受講したりするなど、校内研修の充実を図っている。
- ・必要に応じて校内支援委員会を開催し、情報交流や支援方法の見直しや支援の協力・役割分担の明確化を図っている。
- ・支援員に対しては、支援報告書（日誌）や日常の対話を通して、校長・教頭が適宜、指導・助言を行っている。

3 町内の**センター的機能**を果たすための巡回指導体制の充実



- ・本校では、町内の全小中学校における特別支援教育の充実のため、他校の教育相談や通級の巡回指導を積極的に推進したり、他校の教員のニーズに応じて指導や支援のポイントを指導・助言したりするなど、町内のセンター的役割を果たしている。

○ **学校評価結果と改善方策** (令和2年度 前期：4～7月)

「授業がよくわかる」

児 童 97%

保護者 99%

教 師 100%

「家庭学習に取り組んでいる」

児 童 **97%**



8.2 p

保護者 **90%**



8.8 p

教 師 94%

「読書をしている」

児 童 **85%**



8.7 p

保護者 45%

教 師 72%

「自分のよさを発揮している」

児 童 86%

保護者 84%

教 師 85%

組織力の向上と 人材育成のシフトアップ

◎そのために…

個々の教員の違い（属性・経験、多様性）に寄り添い、きめ細かなコミュニケーションを繰り返していく。



◎キーワード

「同僚性と協働」

「チーム貢献力」

◎後期（8月～12月）経営の重点

- ・ 授業改善から**学習改善**へ…**子どもの視座**に立つ授業と振り返り
- ・ **個別性**に配慮した教員の指導力向上…**教員育成指標**を活用した個々の達成目標の見直し
- ・ 学校経営への**参画**を促すアクション…**リーダーシップ・チーム**の強化による同僚性の高揚